

・ 研究所での生活について

私は研究所の指導員の方の元で、iPS細胞とES細胞を用いて神経に分化させる実験を行いました。さらに最終的には異なる培地で分化させた場合発現タンパク質にどのような違いがあるかを調べました。

最初の1か月は、実験の原理や仕組み、手順、材料などを知るために3つの論文を読み、プロトコルをまとめる作業をし、次の1か月はそれに従って実験を開始しました。論文を読む作業と並行して自分のiPS細胞とES細胞を培養していたので、それを実験に用いました。実験を始める前段階として、他の研究員の方がクリーンベンチを使用しているのを見学したり、実験器具の使い方などを丁寧に教えてくれたりして自分たちで実験をするために必要なことはほとんど教えてくれたのでさほど苦労せずに実験に入ることが出来ました。また実験をするにあたり、昨年度先輩からコンタミネーションをしないようにというアドバイスを頂き、出国前に薬理学教室で基本的な手技を経験させていただいていましたが、実際の実験ではコンタミネーションすることはなく、基本的な実験手技はスムーズに行うことが出来たのであらかじめ準備してから行ってよかったですと感じました。実験の後半では、様々な薬品を使って幹細胞のiPS細胞とES細胞を神経に分化させることや免疫染色などを行いました。その分化させる過程や手順は、研究員の方が経験談や知識を教えてください、改めて経験豊富な研究員の方についていただけていることに感謝しました。免疫染色では、他国からきている短期滞在の研究員の方や、若い短期滞在の大学院生の方などにも助けていただき、その場面でも忙しい中、学生の私たちを手助けしてくれることに感謝するとともに、研究室全体がこのように協力し合えるのは素敵なことだと感じました。

また実験の手技以外などで私が初めてのころに苦労したのは英語です。出国前に英語の勉強は十分していったつもりではいましたが、日本人が一人もいない上にベテランの研究員の方が多い研究室で、研究員の方は忙しい中私たちに時間を割いてくれたので、説明される英語のスピードはとても速く感じすべてを理解するのはとても難しかったです。分からないことを聞こうとしても専門用語を用いてすぐに流暢に英語で話すことはできず、最初の2.3週間は苦労しました。ですが、2.3週間経ったころには専門用語の知識も増えたり耳が慣れてきたりして、一発で何を言っているのか聞き取れることも多くなりました。さらに一か月経ったころには分からないことを完全な英語ではありませんが自分の言葉ですぐに聞けるようになってきて、その時は嬉しさも感じそれだけで実験も楽しく感じるようになってきました。とはいえ出発前に自分ではしっかりと勉強したと思っていた英語があまり通用しなかったのもっとスピーキングを中心に勉強してから行けばよかったですと思

っています。

・その他の生活など

アメリカ滞在中はアパートではなくホームステイを選択しました。その一番の理由は、研究所以外のいろいろな人とも会話をしたかったからです。英語で会話をしたいということはもちろんアメリカに住んでいる人の考え方や暮らしを見てみたいということもありました。ただ、一番の目的である研究の妨げになってしまっはいけないと思ひなるべく自由の利きそうなところを選びました。実際に三か月間住んでみて私は、ホームステイを選択してよかつたと思ひました。その理由として、研究で忙しい時でも食事が出てくることや、日本人の方もいるご家庭だったので研究所での悩みや英語が通じないときの対処法や生活で困ったことなどの相談に乗ってくれる人がいたことなどがあげられます。一人で暮らしすべて自分でこなすこともとても良い経験になり自分の力になると思ひますが、自由の利く滞在先であったため、一人でいろいろやりたいときは一人にもなれて助けが必要な時や週末時間が空いた時などは一緒にいてくれて、精神的な支えでありたくさんのことを経験させてくれる良い環境であったと感じています。

またサンフォードバーナムプレビスメディカル医学研究所のあるサンディエゴは危険な地域に立ち入らなければ治安が比較的良く、気候にも恵まれとても住みやすい街でした。温厚な人が多く、譲り合ひの精神が日本人よりもあるように感じ、私も見習いたいと思ひました。